



《 大槻ケンヂはエッセイで「孤独は青年の心を殺す / 仮面ライダー1号の本郷猛 / 人魚姫は自分から進んで引き受けた / 彼女はなぜ人間になることを選択 / ロマンは地上にある / 殺せば姫は人魚にまた戻ることができた 》

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、アンデルセン童話「人魚姫」を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃん と アンデルセン童話  
「人魚姫」

——王子にふりむいてもらえない童話史上もっとも私たちがヒロイン

人魚姫の物語を知っているか？

人魚姫の物語を知っているか？

人魚姫は王子さまに恋をしてしまい、人間の姿になるが、フラれてしまって、地上の塵（ちり）となって跡形もなく消えてしまう。

さらに、王子はそれに気づかないまま、恋した女性と結婚する。

こんな話↓

こんな話だったのかと驚いた。

最高だと思った。

なぜなら↓

なぜなら、われわれロッキングオン読者も「負けてしまう側」だからだ。

勝てる側の人間ならば今すぐ次のページをめくれ、後ろ向いて帰ってくださいよ、編集長の後記を読んでくれ、人魚姫の物語にたいして「かわいそうだね」「残念だね」なんて人はこの文章はつまらないと思う。きつときみにはスーパー退屈だ。でも、読んでくれるなら読んでくれ。

人魚姫について内容をもうすこし詳しく書く。↓

人魚姫について内容をもうすこし詳しく書く。

人魚姫は海の底深くにある「海の国」の王女である。彼女は一五歳の誕生日に一度だけ地上に顔をだすことを許された。人間の王子さまに姫は一目ぼれしてしまう。しかし、船が壊れて王子さまは海に投げ出されてしまう。人魚姫は大急ぎで助けに行き、砂浜まで運び、だれかが王子さまを起こしてくれるよう、隠れて見守っていた。

そこへ一人の少女が現れて彼を介抱する。王子は自分を助けたのはその少女だと勘違いしてしまう。人魚姫は海の世界に帰っても王子さまの事が忘れられなくなり、地上の世界へ行きたいと願うようになる。

彼女は魔女と契約を結ぶ。

その条件は↓



その条件は、二度と人魚には戻れないこと、王子さまがほかの女性と結婚すると人魚姫の心臓はくだけて海の泡になることだった。

さらに、人魚姫の声はなくなり、足は一歩ごとにナイフの上を歩いているような激痛が走るという。

足の生えた人魚姫は↓

足の生えた人魚姫は地上に出たところを王子さまに救われるが、しゃべることができないため、その後も自分のことを伝えることができないでいた。

王子さまは、助け主だと思っている少女に恋をしていて、ついにその彼女と恋仲になってしまう。それを知った人魚姫の兄弟たちは、姫に魔法のナイフを渡し、「王子さまをこれで殺せば姫は人魚にまた戻ることができる」という。

ほどなくして二人の結婚になり、やっぱり殺すことはできないと思った人魚姫はもっていたナイフを捨ててしまう。

そして、海の泡となって消えてしまう。

王子はそれにずっと気づかないのである。

↓

長くなってしまったが、ざっとまとめると、地上の王子に恋をした人魚の姫が人間になるが、恋に敗れてしまってその身がバラバラになってしまうという物語だ。



人魚姫はわれわれである。

なぜなら、報われないからだ。

われわれは人のために何かをやってもそれが評価されることはない。↓

われわれは人のために何かをやってもそれが評価されることはない。というか、いまいる世界に評価してくれる人がいないのだ。「そんなの当たり前だよ」といえるのならノーセンキューだ。それは自分の行っていることが誰かの目に届いた満足感を一度でも味わった人間の言葉だからだ。

ひとりも理解者がいたことがない場合、正論は人を救わない。孤独な若者を殺せる力がある。

かつて、大槻ケンヂはエッセイで「孤独は青年の心を殺す」といっていた。あるカフェに客が自由に書き込めるノートがあって、それを読んでもある若者の独白があったという。若者は映画の撮影現場で働くスタッフらしい。そこにはこの世の理不尽と不条理のすべてがあるような現場にいるという内容で、とにかく若者は苦しんでいた。だれも自分の働きなど知らず、関わった作品を一体だれが見てくれるんだよ、考え出すと止まらないそんなダークな無限ループに突入していたという。大槻ケンヂはこの書き込みにえらく共感していた。「報われないからかもしれないけど、おれは君の作品を見るよ、大丈夫」、というようなことを書いていた。

誰からの目線もないのは辛い。↓

誰からの目線もないのは辛い。自分が一体なんのためにやっているのか分からなくなる。そんなとき、人魚姫を思う。

人魚姫は王子さまと同じ地上の人間になるため↓

人魚姫は王子さまと同じ地上の人間になるために、声を失い、歩くたびにナイフの上を刺されているような痛みを引き受ける。何かを得るには何かを失うのは世界の理だ。

例えば、仮面ライダー一号の本郷猛は大いなる力とひきかえに力の加減を失い子どもを抱き寄せることができなくなった。仮面ライダーの場合は、敵であるショッカーに無理矢理改造されたので、自主的にそれを受け取ったのではない（それによってショッカーを許せない動機が強い）。

人魚姫とそこが違う。

人魚姫は自分から進んで引き受けた。そして行動を起こしていく。↓

人魚姫は自分から進んで引き受けた。そして行動を起こしていく。それはおとぎ話としては定番の物語ではないように見える。姫と呼ばれる者はたいてい王子さまの求愛によって愛を自動的に獲得するからだ。

姫は受動的なのである。王子さまをテキトーに待って、そうしたら本当に王子さまが惚れてくれるのだから最高だ。でも、そうじゃないだろ？と人魚姫の物語は教えてくれる。

王子さまに向かって自ら行動を起こす女性が描かれる。人間になったとしても成功するかはまったく分からないのに、それでも行動をする。声と尻尾をなくしてでも挑戦する。しかも尻尾は自分の種族のアイデンティティであるはずなのに、それすらも捨てるのだ。海の世界にいればいつまでもぬくぬくと暮らしていけるのに。

つまり、いままでの自分とこれからの自分を捨てるということである。それをしても、人魚姫はロマンを追う。

↓



人間の姿になったとしても生まれついでの人間ではないのでハンデをもつ。声と足の激痛だ。一生そのハンデを誰にも伝えられず、自分の心の奥底にとどめなければならない。

そうまでしないと、王子さまを獲得する土俵に上がれないのだ。いや、獲得する土俵に上がれるかどうか分からない。相手は身分が高い王子さまである。人魚姫は「地上の人間」というとてつもなく拾い土俵に上がっただけだ。それでも、彼女は人間になることを選択する。ロマンのために。



神聖かまってちゃんは人間になることを選んだ。↓

神聖かまってちゃんは人間になることを選んだ。

当初の彼らはインターネット配信によってファンを作っていた。ネットは最初こそバンドを広めるための手段だったかもしれないが、そこが次第に彼らの居場所になっていく。ヤマソニの新人枠やNHKに出たり、ときどき起こる大きなインパクトによってバンドの知名度はドカンドカンと上がっていった。

彼らは、ネットからマスメディアへ行っていた。居場所はネットだが、彼ら見ているロマンは地上にあるからだ

地上の人間世界に出るといことは痛みが伴う。↓

地上の人間世界に出るといことは痛みが伴う。なぜなら、ネットの海にもぐっている者たちは地上では息が苦しかったからだ。つまり、彼らと彼らに親近感をもつネット使いは人魚なのだ。息できる場所は海（ネット）とみるからである。だから、地上に出て人間の姿を保つには一歩歩くごとに引き裂かれるような激痛を感じる。

神聖かまってちゃんの求めているロマンは地上にある。それは地上（マスメディア）に出て行って獲得するしかないものだ。人魚姫のように、たとえ王子さまにフラれて身が粉々になるかもしれなくても彼らはロマンを手にするかもしれないという権利を選ぶ。



作者のアンデルセンはなぜ人魚姫のような孤独とロマンの話を描けたのか↓

作者のアンデルセンはなぜ人魚姫のような孤独とロマンの話を描けたのか。それは、彼女自身がロマンと孤独がついてまわる職業の「作家」だったからだろう。

時間と次元を超えて彼女の描いたロマンを求める物語は、現実の世界で神聖かまってちゃんに引き継がれている。←

うおお

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87815>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ